

日常生活史——I 氏の場合

「1900 年から 1933 年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」（その九）

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第 91・97・98・99・101・103・105・107 輯に続く、「1900 年から 1933 年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第 91 輯を参照されたい。

今回利用した、当該資料は、1980 年 1 月 24 日 10 時より 13 時 30 分まで、I 氏のブラウンシュヴァイクの自宅でインタビューした内容を、A4 タイプ用紙 39 ページに書き起こしたものである。ここで、参考のため、I 氏の略歴と両親について簡単に記す。

| | |
|---|---------------------------|
| 1904 年 8 月 4 日 | ブラウンシュヴァイクで誕生 |
| 1918～1922 年 | 機械工，1922～1929 年 ボイラーマン補助員 |
| 1929 年～ | 機械組立工 |
| 1919～1933 年 | 自由体操協会，ドイツ金属労働者同盟 |
| 1924～1933 年 | ドイツ・ライヒスバンナー |
| 1930 年以降 | SPD |
| 1929～33 年 | ドイツ・フリーメーソン協会 |
| 役職：児童体操指導者，青少年体操指導者，ドイツ金属労働者同盟傘下配管 工同盟副議長兼会計係（1926～1933 年） | |
| 1929 年 11 月 30 日 | 洗濯物のアイロンかけ人と結婚 |

- 父：1876年にベアスムのクライン・フレーテで誕生，1962年に西ベルリンで死亡。農業労働者，1916年まで御者，1918年から1920年までビュッシング社の工場労働者，1920年から1941年まで道路清掃人および家屋管理人，ブラウンシュヴァイク軽騎馬兵会員。
- 母：ハルツ地方のシャーペンで誕生，1945年にブラウンシュヴァイクで死亡。アスパラの皮むき人（缶詰工場女工），未組織，出産は5回。

1. 両親と祖父母について

御者をしていた父は，いつも家具やその他のがらくたをどこかへ運ばなければなりませんでした。4輪のついた車と，2頭の馬が引っ張る馬車でした。私たちが，その馬車で2日間かけてハルツブルク *Harzburg* まで行ったときのことを，覚えています。私も一緒に行ったのです。秋で，とても寒かったので，ホテルの新しいシーツのかかったマットレスの上で寝ました。途中，ベアスム *Börsum* で馬を車から離して，まず餌をやり，水を飲ませました。そして，さらに馬車を走らせ，晩方に荷下ろしをしました。そして，その夜はハルツブルクに泊まったのです。帰り道，私たちはふたたびベアスムめざして走り，そこで休みをとった後に，ブラウンシュヴァイク *Braunschweig* へ戻ったのです。鉄道は，値段が高すぎたのです。つまり，荷物は貨車に積み替えなければなりません，馬車だと店からすぐに積み出せますからね。私たちの家の後ろ側にある中庭に車台を置いてありました。木の車台でしたが，この車台に家具が積み込まれたのです。馬は山越えることができました。私は，いつも一緒に行く時は，マルツ・ビール（：アルコール分のないビール）をもらいましたが，まだ普通のビールはもらえませんでした。

私の母方の祖母は，1853年10月23日にハルツ *Harz* 地方のツォルゲ *Zorge* で誕生しました。祖母が何歳まで生きていたのかは，知りません。父方のも母方のも，私の祖父母たちは，ブラウンシュヴァイクには住んでいませ

んでした。母は、祖母と一緒にシャーペン *Schapen* からブラウンシュヴァイクに出てきました。母方の祖父は、その時、すでに亡くなっていました。祖父はシャーペンと一緒に暮らしていたのです。父方の祖父母は、クライン・フレーテ *Klein-Flöte* に住んでいました。父方の祖父の職業はよく知りませんが、日雇い労働者だったと思います。

2. 兄姉たちについて

私は、長兄のフーゴー *Hugo* と一番よく理解し合っていました。彼には仲間同士のような親しみを感じていました。彼もいつも働いていたので、私と同じような価値観をもっていたからです。彼が働いていた会社で、彼はだまされていました。つまり、彼が事故にあった時に、会社が彼の健康保険料をかけていなかったということがわかったのです。彼が屋根から落ちた時のことです。ここブラウンシュヴァイクの、今はシンメル社 *Schimmel* があるハンプルガー通り *Hamburgerstraße* に、以前は大きなビール製造所があったのですが、この工場の屋根に足場を組んでいるときに落ちたのです。1920年代のことでした。彼は、他の仲間と一緒に作業班の中で作業をしていたのではなく、一人で仕事をしていたので、落ちてから数時間後にやっと発見されたのです。一人で仕事をしていたのですよ。彼は地面に横たわっているところを発見されました。彼は、6メートルか8メートルの高さから落ちたのだと思います。怪我に加えて肺炎も起こしました。彼は、政治的に私と同じ考えでした。

次兄のアルフレット *Alfred* もそうでした。彼もライヒスバンナー *Reichsbanner* に入っていましたし、今も労働組合に入っています。姉は、何とか、いつも身の丈に合ったもの以上のものを望みました。彼女は、父から一番ひいきにされていましたが、娘だったからでしょう。それに彼女が、私たちの家に相応な生活よりもっと高い水準の生活を目指していたから、それが父には気に入っていたのでしょう。

3. 両親の家の住居

〈ノイエ・クノッヘンハウアー通りの住居〉

私が 1904 年に誕生した時、両親はノイエ・クノッヘンハウアー通り *Neue Knochenhauerstraße* 30 番に住んでいました。この家は祖母のものでした。私たちは、この家に 1912 年まで住んでいました。この住居には 3 部屋あり、他の家族の住居からは独立していましたが、大きな廊下はありませんでした。しかし、次の間のような小さな廊下がありました。地下室もついていました。屋根裏の物干し部屋もありました。住居のなかに台所もありました。簡易台所ではなく、きちんとした本格的な台所でした。納戸はありませんでした。当時、納戸とか食品貯蔵庫のようなものは、まだなかったのです。

トイレは中庭でした。風呂はありませんでした。この家には、私たち 4 人の子供と両親で住んでいました。この住居内には、その他の人は、間借り人などいませんでした。

〈ブルク広場の住居〉

1912 年にブルク広場 *Burgplatz* の 2 番に引っ越しました。私は結婚するまでここに住んでいました。つまり、1929 年まで住んでいたわけです。この住居は、大きな廊下のある、やはり 3 部屋の住居でした。この家が建っていたのは、本当はフィーヴェーク *Vieweg* (：通り名) なのです。私の父は、ランガーフェルト社 *Langerfeld* で、御者をしていたのですが、馬小屋と馬車がそこにあったので、引っ越さなければならなかったのです。この家の方が前の家よりも馬小屋に近かったのです。今、ランガーフェルト社は、アム・ザック *am Sack* にあります。アム・ザックと、それからパーペンシュティーク *Papenstieg* にもあります。ランガーフェルト社は、昔は馬だけで、まだ自動車を持つてはいませんでした。

父は、ランガーフェルト社の御者をしていたので、ランガーフェルトの大奥さんや若主人、それに彼女の義理の息子のために、毎日曜日、2 頭の、あ

るいは3頭の乗馬用の馬を、彼らのためにガウス通り *Gaußstraße* へ連れて行き、その後でまた馬を私たちの住むブルク広場の馬小屋へ連れ帰ってくるのです。

このブルク広場の住居は、裏屋（：通りに面した家屋の後ろ側にある家屋）だったのですが、トイレは住居の中にありました。風呂はありませんでした。この裏屋には、私の家族以外には誰も住んでいませんでした。私たちの住むこの住居は、以前、主人たちが使っていた表屋（：通りに面して建っている家屋）の裏側にある長い家屋で、昔は使用人たちが住んでいたのです。以前は表屋には階段でつながっていて、階段を上がると、その先には台所と女中部屋がありました。この裏屋には、もう私の家族だけしか住んでいなかったのです。表屋には他人が住んでいました。

私の家族は6人で裏屋に住んでいたわけです。しかし、祖父母も他の親戚の人々も一緒に住んではいませんでした。台所は住居の中にありました。屋根裏には大きな物干し部屋もありましたし、食品貯蔵庫も住居の中がありました。このブルク広場の住居が、私の両親と一緒に暮らした最後の住居です。

〈オーダ通りの住居〉

1929年に、私はオーダー通り *Odastraße* の妻の両親の住居の一室に引っ越しました。この部屋で妻と一緒に暮らしはじめたのです。この時はまだ失業していませんでしたが、ナチ時代に失業しました。その後、この住居を出ました。この住居の一室に住んでいたわけですが、住居自体は3部屋の住居で、当時としては、かなり近代的な住居でした。食品貯蔵庫やバルコニーもありました。この住居は1911年に建てられたのですが、かなり近代的で、台所もありました。私たちは、台所を一緒に使わせてもらっていました。トイレも住居の中にありました。この家は、賃貸用の家屋で、4階建てでした。1階は店屋がひとつと住居もふたつありました。その他に各階に3つの住居があったので、ぜんぶで11の住居があったわけです。私の住んでいた住居は、妻の両親が借り主でした。私たちは又借りをしていたというわけです。家賃

をいくら両親に払っていたのかは、私は知りません。妻にきいてみなければわかりません。

4. 学校生活

学校では、しばしば教師が生徒たちを叱りつけました。たとえば、ある教師は中指が曲がっていたのですが、算数の時間に練習問題を出して、皆がノートに練習問題の回答を書いていると、「ペンを置きなさい！」と言います。そこで誰かがペンを置かないと、その教師はその生徒の所へ行って、その中指の曲がった手で、その子を殴るのです。そのようなことは、何度も何度も起こりました。それに体操の教師も私たちを殴りました。彼も厳しかったのです。防御の動作をしなかった生徒や匍匐動作をしない生徒がいて、その生徒をわざわざ呼びつけて叱りつけました。どの生徒もみな、彼にはやられました。しかし、いわゆる教師のひいきの生徒もいました。この学校は中級市民学校だったので、たとえば、村から私たちのクラスに通ってきている生徒もいました。まあ、彼らは何かを持ってくるので、そうするとひいきの生徒になったということです。彼らは、私たちよりも良い成績をもらい、私たちほどにはきびしく要求されませんでした。戦争中だったから、教師たちもソーセージが欲しかったのでしょう。

学校で特に良かった思い出や、悪かった思い出といえば、ある教師を思い出します。彼は棒を持っていて、「棒を持ってこい、お前を鍛えてやる」と生徒に言うのです。そうすると、その生徒はベンチの上に横たわらなくてはならず、その上に彼は棒を振り落とすのです。しかし、私はその後、ずる賢くなりましたよ。そこで、私はもう一人の生徒と一緒に中が空洞になっている棒を一本取り出し、棒の端まで穴を突き通しました。その空洞の中にインクを流し入れて、チョークで穴をふさいだのです。案の定、ある時、彼が棒を取り出したのですが、まさしくこの棒を選び出したのです。そして、彼がその棒を振り回した時に、ちょうどよいタイミングでチョークが飛び出して、

インクが教室中にばら撒かれました。教師たちは、誰がやったのかを調べに調べ回りました。しかし、とんでもないことに、私が一番の友達と思っていた生徒が、私のことを密告したのです。それで、私は、4の成績をつけられて、両親を呼び出さなければならないと警告されました。もちろん、密告した生徒はクラス中の生徒から、いわゆる袋だたきにありました。

この学校に図工の教師がいました。私は、デッサンが上手だったのですが、この図工の教師は、この事件の際に、私を助けてくれました。彼は「この子は外見とちがって、悪い子ではないし、それほど悪いことをしたわけでもないのです」と言ってくれました。彼は私の側に立ってくれました。私は、上手にデッサンができたので、彼のお気に入りだったのです。彼は「お前は、まったく何て事をしでかしたんだい。何でそんなことをしなければならなかったのだ？」と私に言いました。そして、「そんな事をもうやってはいけないよ」と言ったのです。私は「あの先生がいつも僕に『棒を持ってこい。おまえを鍛えてやる』と言うので、腹が立ったのです」と言いました。「僕はもうれつに腹が立ったのです」とまた私は言いました。そして、この図工の教師が、校長に「いや、この生徒は私の所では、いつも行儀よく振る舞っていますから、彼について苦情を言おうと思っても、何も思いつかないほどです」「彼は正直ですし、よく勉強しますし、宿題もよくやってきます」と私のことを弁護してくれました。そうやって彼は私のことを救ってくれたのです。

5. 子供時代の労働と遊び

家事をしていたのは、主に母でした。ええ、母でしたとも。父は、ぜんぜん家事の手伝いはしませんでした。だから、たいていは、私たちが皿を洗って、布巾で拭いたり、その他すべての家事の手伝いをしなければならなかったのです。姉は、あまり家事をしませんでした。彼女は父のひいきの子供だったのです。だから、彼女は私たちのようにたくさん手伝わなくてもよかったのです。つまり、男の子たちが家事の手伝いをたくさんしなければならなかつ

たということです。子供の時、自由になる遊びの時間が思う存分にたくさんあったわけではありません。よその家の子供たちは、私たちよりも自由な時間があって、たくさん遊び回ることができる、とよく思ったものです。私たちよりもよその家の子供たちには遊び回る時間が多くあったのです。いずれにしても、私たちは自分たちに与えられた、決まった分量の仕事を片づけなければならなかったのです。だからいつも、遊び時間が少ないという思いがありました。

しかし、私は下級市民学校へ行きました。それで私も学校やその他のことにもお金があるので、自分で稼がなければなりませんでした。だから、私たちは『ブラウンシュヴァイガー・ノイエステン・ナッハリヒテン』新聞『*Braunschweiger Neuesten Nachrichten*』-Zeitung の配達をしました。長兄と私が新聞配達をしたのです。私たちは午後4時に、『ブラウンシュヴァイガー・ノイエステン・ナッハリヒテン』があった、リッターブルンネン *Ritterbrunnen* で、新聞を受け取らなければなりませんでした。私の家には1台の古い乳母車があったので、それで新聞を運んだものです。ランゲ通り *Lange Straße*、カイザー通り *Kaiserstraße* と労働者居住地域を受け持って、新聞を配達していたのです。私、いや私たちが稼いだお金は母に渡して、母は必要な時に私たちのためにいろいろな費用を支払ってくれたのです。つまり、中級市民学校の費用のためにです。当時は、中級市民学校では授業料がかかったのです。こんな事があったので、どうして私のような人間は他の人間のように生活できないのだろう、少なくとも、もう少し楽に生活できないものか、という考えに至ったのです。

その後、修行中にもお金を稼ぎました。当時、私は、夜、リッター通り *Ritterstraße* の工芸学校に行っていたのですが、この学校にもお金を払わなければならなかったのです。そこで、私はレーベンリンク *Rebenring* にあった居酒屋で、夜はケーゲル（：ボーリング）のピンのセッティングで稼いでいました。少年時代もずっと、いつも仕事をしていました。昼に家に帰り、学校の宿題をします。そうして午後になると、新聞配達に出かけるのです。

そして青年職業学校にも行きました。これは無料でした。でも、工芸学校はちがいました。私はさらに修行を積みたかったのです。私にはいくらかそのための勇気がありましたし、自分自身に「おまえも何とか修行を積むつもりなのだろう」と言ったものです。そうして製図と計算などを勉強しました。これの授業料は私が自分で払わなければならなかったのです。両親は払えませんでしたから。これは夜間学校で、夜の授業でした。

私たちが遊ぶのは、いつも外でした。家の中ではありません。中庭でも遊びましたが、あまり中庭で遊ぶことはできませんでした。というのは、表屋にまだランガーフェルトの管理人が住んでいて、息子が一人いたのですが、彼がいつも私たちの後についてくるので、あまり中庭で暴れ回れなかったのです。

ノイエンクノッヘンハウアー通りでは、おもに通りで遊びました。中庭では遊びませんでした。まだ覚えているのですが、私たちは冬に、通りに大きな雪のダムを築きました。私たちはウィルヘルム通り *Wilhelmstraße* に続く角地に住んでいたのですが、その角地に、ある晩のことですが、大きな雪の壁を築きました。というのは、ウィルヘルム通りの店屋に行くために、ミルク運搬馬車の御者やビール運搬の御者が馬車で通りかかると、私たちは「少し飴がほしいのだけど」と頼んだのですが、彼らは何もくれませんでした。何もくれたことはありませんでした。そこで私たちは、雪で大きなダムをこしらえたというわけです。そうしたら、彼らは通り抜けることができなかったのです。彼らは戻らなければならないので、もちろん警察を呼びました。警官が来て、彼らはもう私たちがやったということは知っていましたが、それをはっきりとは言わなかったのです。その代わりに、「なぜこんな物をつくったのだ？」と言いました。それで、私たちは「彼らはずっとここを走り抜けて、ここで鞭の音をさせたりするのに、僕たちが道をあけても、僕たちに一度として少しでも何かをくれることはないのさ。だから、こんなことをしたのさ。だから、彼らはどこか回り道をして行けばいいのさ。そうでなけ

れば、僕たちに何かをくれるか、どちらかだよ」と言いました。私たちはブルク広場で遊んでいましたが、この雪のダムを大聖堂の後ろのブルク広場に作ったのです。当時は、そこには何も建っていなかったのです。そこで遊ぶこともできたのです。私たちは、ギルド・ハウスの隣家の息子と遊びました。それに、学校の仲間がたくさんいました。同じ学校の仲間たちです。私たちは、かくれんぼをして遊んだり、戦争ごっこ、それにボール遊び、つまりボール投げをして遊びました。それに棒でボールを打ったりもしたのです。当時、私たちはまだ自転車というのを知りませんでした。私がはじめて自転車を買ったのは、第一次世界大戦中だったのです。

6. 親子関係

子供時代、両親の家では、家事を手伝いました。もちろん、いつも手伝わなくてはならなかったのです。私たちはそれぞれ、仕事を与えられて、靴磨き、地下室からの石炭運び、中庭の掃除などでした。私もこれらの仕事を交代でしていました。

まだ日曜学校に行っていた時のことですが、大聖堂で毎日曜日の10時に日曜学校が始まりました。ある日曜日のことでした。友達が私のところに来て、「お前、馬鹿じゃないのか、一緒に来いよ、僕たちは市民公園（：ビュルガーパーク *Bürgerpark*）に行くよ」と言うので、私は「教会の後で？」と尋ねたら、「馬鹿！」と言われてしまい、とうとう彼に説得されて、一緒に公園に行ってしまいました。父がその日曜日に教会の扉の前に立っていると、子供たちの世話をしていたヴィッヒマン *Wichmann* 嬢が、父の所に寄ってきて、話しかけたのです。つまり、「さて、あなたの息子さんは何をしていますのしょうね？ 彼は病気なのですか？」と尋ねたのです。私の父は、びっくりしてしまいました。さらに、彼女が「病気が重いのでしょうか？」と尋ねるので、父は、「いいえ、息子はつまり……次の日曜日にまた来ますとも」とうろたえながら答えました。しかし、すぐに体制を立て直して、「もちろん、彼はまた

来ますとも」と言ったのです。そうこうしているうちに、私は昼に家に帰ってきたのですが、父が私に「ああ、今日の日曜学校はどうだったのかね?」と尋ねたのです。私は「ああ、ヴィッヒマン嬢がお話をしてくれたよ。とても良かった」そして、私が「今日」という言葉を言った瞬間に、私の右手と左手に靴を一足押しつけられていました。そして、「そうか、お前が私に嘘をついた罰として、今日から4週間、私たちの靴全部を磨くのだ」と父は私に言い渡しました。4週間です。靴の上側だけでなく、靴底も、踵までも、すべてをきれいにしなければならなかったのです。そういうわけで4週間、私はみんなの靴を磨かなければならなかったのです。そのような罰としての仕事を、よく与えられました。誰かが何か問題を起こすと、いつもの仕事の他に、さらに仕事を付け加えられたものです。鞭でぶたれたこともあります。私たちが馬鹿なことをしでかすと、鞭でぶたれたものです。ちょうど彼の機嫌が悪いときには、彼は私たちに当たりちらして、何とか発散する必要があったのです。彼のもとでは、なんでも厳しく、軍隊式に鍛えることが肝心だったのです。

母は、そんな時、私たちの側に立ってくれました。母は、ときどき私たちにこっそりと教えてくれたものです。彼女は、父よりも私たちの方を優先したのです。そして、「気をつけなさい、そんなことはしてはいけないよ。お父さんはそんなことが嫌いだし、そんなことをさせるつもりもないのを知っているだろうに」と言ったものです。そして彼女は「お前たちもいくらかはお父さんの気に入るようにしなければいけないよ」と言いました。

父は、屋根裏部屋に鳥を飼うための大きな囲いを持っていました。カナリア用の囲いです。私たちは、えさ用に卵やラスクをすりつぶさなければなりませんでした。そのえさは、父が自分で与えていました。そして、戦争前、私たちはウサギを飼いました。家の後ろの庭で50匹くらいのウサギを飼っていたのです。私たちは毎日、外に行って餌用の草を刈ってこなければなりませんでした。私たちは、いわば草を盗んできたのです。畑や堀で鎌を使って草を刈ったのです。ウサギは、大きくなるとつぶして食べました。売ったり

せずにつぶして自分たちが食べたのです。母は、私たちを叩いたりしたことはありませんが、父は私たちをよく殴ったものです。その理由は、例えば彼が厳しい顔つきをしている時に、それに合わせなかったからなどということでした。彼が殴る時は、理由もわからずにあっという間に殴られたものです。それが彼の育った家での習慣によるのか、それとも他の原因があるのかは、私はわかりません。

父が最後に私をこらしめたのは、まだ私の修行中のことでした。私はこういう経験をしたのです。つまり、私は小遣い程度のお金しかもらっていませんでしたが、修行中の徒弟としては、そんな程度だったのです。若者ですから、私は少しばかりおしゃれをしたかったのですが、当時、ダム *Damm* に紳士服の店『クローゼ』‘*Klose*’があり、この店にカラーの長い襟飾りがあって、それが新しい流行でした。昔、私たちは襟飾りだけを着けていたのですよ。首の回りに着ける物で、襟飾りと言っていました。私はちょうどお金を持っていたので、3個のカラーを買いました。そのお金は、私の小遣いを貯めていたものでした。3個のカラーを買って家に帰ったら、父がそこにいました。「何だ?」「おまえは一体、何を買ってきたのだ?」と彼が尋ねるので、「僕用のカラーをいくつか買ったのさ」と私が答えると、「そうか、じゃあ、私に見せてみなさい」と父は言いました。それで、私は袋をあけて彼にカラーを見せました。そうすると、彼は「ところで、誰がお前にそんなことを許したんだい?」と私に言い、私は「だけど、お父さん、聞いておくれよ」「僕が貯めた僕のお金だよ。僕もちょっとばかり自分を感じよく見せたいのさ」と言いました。「そうか」「それでお前は買っても良いかどうか尋ねたのか?」と父が言うので、私は「いいや」「なぜ買ってもよいかどうかの許しを得なければならないの?」と言いました。「そうか」「もうそんな許しを得る必要がないだって?」と父は言いました。修行中でしたから、私は、たぶん17歳くらいだったはずですが、「そうだ」と答えたのです。そうすると、父が「そうか、それを私によこしなさい」と言って、私からカラーを取り上げるや、ストーブの扉を開けて、その中にカラーを放り込んでしまったのです。みんな燃え

てしまいました。「わかったか、この次に何か買うときには、お前の父親に尋ねなければならないのだぞ」と彼は言いました。本当に、まったく狂っていました。ただ私が彼に尋ねなかったからというだけのことなのです。こんな経験もしたのですよ。これが父から受けた最後のおしおきでした。しかし、その後は、もうそんな事はさせませんでした。その後は、私はいくらか利発になりました。逃げるか、そうでなければ「僕にさわらないでくれ」と言いました。

両親は子供の前でお金の問題について、お互いに話し合っていました、私たちと話し合うということはありませんでした。私は修行中、家賃の支払いのためだったり、衣服や靴などをかうためでしたが、私のお金を差し出さなければなりません。毎月、父は賃金をもらってきました。お金が入ると、使い道や払いについて、両親の間では、しっかりと話し合われました。しかし、子供たちは、その話の仲間には入れてもらえませんでした。

私自身の家庭では、妻がお金を自由に使っていました。週単位の家計でした。私たちは、当時、週給をもらっていましたから。彼女は、食費やその他にかかる分を取り、私は新聞代や家賃を払っていました。それで残ったお金は、まず脇によけておいて、衣類などの特別な出費のために使いました。私と妻はお金のことについては、しばしば話し合いました。私たちは、子供たちに「聞きなさい！ 私たちは、何と何と何をしようと思っている。だから、私たちは他の物を買うことはできない。その分を計画に回さなければならないからね」と言い聞かせました。子供たちが学校を出た頃からですから、14歳ころから、子供たちとお金のことについて話すようになりました。

私の個人的な問題について、両親と話し合いはしました。問題というのは、たとえば女の子と親しくなったりした時などに、両親とそのことについて話しました。しかし、大体は母と話すことが多かったです。ほとんどが母とでした。「あの娘のことをどう思う？」とか、「その女の子を連れてきてもいい

かな？」などという風に話していました。それで、「その娘を紹介してもよいかな？」と尋ねて、その娘を紹介したら、「あの娘のことをどう思う？ 僕と彼女は気が合うと思う、それともどう思う？ 僕に似合いの娘だろうか？」というような事を話していました。こういうことを、ほとんど母と話していたのです。母は、いつも私のことを理解してくれていると感じていました。母は、外で賃仕事をして、めいっぱい働いていたにもかかわらず、いつもそういう相談にのってくれていました。

私は、父よりは母の方がよく理解し合っていました。なぜかという、私の母は、多分、子供時代に父よりも苦労したのです。私の父は、軍国主義者で少し横柄でした。つまり、軍国主義者以外に、何と呼んでもよいのかわかりません。彼には、いつもランガーフェルトという彼の主人がいて、それが彼にとって唯一のもので、かつ彼のすべてだったのです。彼はランガーフェルトに喜んで仕えていたのです。まったく正真正銘の農家の下男のようでした。多分、それ以外の振る舞い方を知らなかったのでしょう。彼の両親が、昔、そう教えたからなのか、それとも彼が他のやり方も知っていたのかどうか、私はわかりません。しかし、私の見るところ、彼は支配者でした。つまり、家庭では支配者でよそでは召使だったのです。だから、私が労働組合に入った時、それは、彼にとっては気に入らないことでした。当時、私はまだ両親の家に住んでいましたが、それでも私は自分の意志を通しました。家にいることができたのですから、意見の相違がそれほど深刻な事態に至ったというわけでもありませんでした。父は、ただ文句を言っただけです。私は1919年に自由体操協会 *Freie Turnerschaft* に入りました。その時、父は「お前はそこで一体、何をするつもりなのだ？」と言ったのですが、私は「活動して、いろいろな人と知り合うつもりだよ。もう多くの人と知り合っているけれどね。僕がどこに属す人間なのかは、知っているつもりだよ」と言いました。私は社会主義者や社民主義者の両親のいる家庭の出身ではありません。母は、父とは少しばかり、違っていました。母は、いつだって働かなくてはならなかったのです。彼女は、いつも仕事に追い立てられていたのです。

つまり、子供たちを養うためにです。

両親から性については、それほど説明を受けたことはありません。

7. 結婚

妻は、私と結婚した時、ブレネッケ&ナーデ社 *Brennecke&Nade* でアイロンかけの仕事をしていました。いつからアイロンかけの仕事を始めたのかは知りません。彼女は、結婚したときに、仕事をやめたのですが、結婚後もまだパートで働きました。つまり、後に私が失業したために、ふたたび、1933年からブレネッケ&ナーデ社でアイロンかけの仕事を始めたのです。

舅の職業は、自営の木工家具職人でマイスターでした。

私は、自由体操協会に所属していて、そこで妻と知り合ったのです。それ以前、私は、自由体操協会で別の女の子と付き合っていたのですが、そのうちに彼女とうまくいかなくなったのです。なぜなら、彼女が私の言うことに従わなくなって、他の男とも付き合ったりしたので……そこで私は彼女との仲を終わりにしたのです。それから、その後に妻とコンサート・ハウス *Konzertthaus* のダンス・パーティで知り合いました。当時、妻は自由体操協会に所属してはいませんでした。1926年に知り合い、1927年に婚約しました。私が24歳のときのことです。結婚のプロポーズは、私がしました。私の方が結婚にたいして積極的でした。妻との前に婚約していたことはありません。ここに、私たちの結婚証明書があります。日付は1933年10月3日となっています。これはつまり、教会の結婚証明書です。

8. 性・避妊・妊娠中絶

〈性・避妊〉

性については、自由体操協会で仲間たちからいろいろなことを聞いて知りました。もう、どんな風に女の子を扱ったらよいのかなどということを知っ

ていました。「おお、見てみろよ、あの娘も可愛いぜ!」「どう思うんだい?」などと言われたりしました。そんな風にしてアドヴァイスを受けたのです。

私は、妻と結婚する前に他のガールフレンドたちと付き合っていて、彼女たちとしばしば出かけていました。私は16歳か17歳の時に、当時のガールフレンドと初めてのキスを経験しました。昔は、女性は処女のまま結婚したのですが、男性の場合はちょっと違っていました。昔は、理性のある人間として処女を尊重しました。それは、今日とは、つまり今日の若者とは違っています。どちらかというと、処女のまじめさとか人間性を尊重したのです。

〈避妊〉

当時、避妊について話しているのを、労働者青年部かどこかで聞いたことはあります。私は労働者青年部に所属していました。会合には金属労働者青年部のメンバーも入っていましたが、そこでは「6人も7人も子供を持っている両親には楽しみは何もなかった」ということに関して、話し合われていました。それは、私が16歳か17歳のことでした。この労働者青年部というのはSAJ(社会主義労働青年)のことですが、その前は子供時代の友人たちや自然愛好家の友人たちとの私的な集まりで聞いていました。当時、避妊の方法としてはコンドーム以外には何もありませんでした。その他の方法は知りませんでした。避妊について両親が話し合ったかどうかについては、まったくわかりません。私の知るかぎり、避妊について話してはいませんでした。若い夫婦の間で、コンドームが使われていたというよりは、スポーツをする時に若者たちが、コンドームについて話していたのです。とくに戦争後は、いわゆる性病が蔓延したので、若者たちはそのことを注意されました。

9. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

〈宗教〉

私は、1918年だったと思いますが、堅信礼を受けています。まだ覚えてい

るのですが、父が旧市街の市庁舎で背広を買ってくれました。その背広は古着集めから出た物でした。私には大きすぎたので、仕立屋に私に合うように仕立て直してもらいました。私の2人の兄たちも堅信礼を受けています。姉も堅信礼を受けています。

私は、教会の合唱団で歌ったりもしていました。児童合唱団です。だから、聖歌隊でも歌いました。大体は教会の催し物に参加していて、遠足などにも行きました。その後、1919年に教会を脱退し、そして教会にはもう属しませんでした。にもかかわらず、その後、私はふたたび教会で結婚式を挙げたのです。というのも、それ以外には、私の上司のもとで仕事をするのができなかったでしょうから。だから、その後、ふたたび教会から脱退しなければならなかったのです。私が教会で結婚したのは、1929年ではなく、それより少し後でした。その時は、すでにナチ時代でした。もうヒットラーが政権をとっていた時でしたから。つまり、まず1929年に戸籍役所で結婚しただけでした。しかし、その後、新教の教会で結婚式を挙げたということです。私たちが結婚したとき、すでに妻も教会から脱退していました。私たちは、ふたりともに教会から脱退していたのです。

〈政党〉

SPD には1930年に入党しました。

ライヒスバンナーではアウグスト・ユーンケ *August Juhnke* と第13同志隊で一緒でした。この隊の仲間が集まる居酒屋がシャルン通り *Scharrnstraße* にあって、ユーンケはこの居酒屋を経営していました。この居酒屋の名前は『ブラウナー・ヒルシュ』‘*Brauner Hirsch*’ だったと思います。この居酒屋はアウグスト・ユーンケのものだったのです。

両親の家では、政治については、まったく議論されることはありませんでした。

私自身の家庭では、私と妻は政治について話しますし、子供たちとも話し

ました。私の子供たちも体操協会に入っています。何かの催しなどがあるとき、たとえばメーデーや労働組合の催しなどがあると、私は子供たちと納得のいくまで話し合いました。そして、そういった催しに連れて行きました。

私の両親は、『アルゲマイナー・アンツァイガー』‘*Allgemeiner Anzeiger*’を購読していました。他には読んでいませんでした。私の父は、彼の主人であるカール・ランガーフェルト *Carl Langerfeldt* を尊敬していました。彼は独身で、私たちの家の中庭に来ると、私たちを肩の上にのせ、乗馬ごっこをしてくれたものです。その他に、州立劇場の男性歌手ヴィートリッシュ *Wietrisch* やアルヴィーネ・ナーゲル *Alwine Nagel*、——彼女は同じく州立劇場の女性歌手であり、俳優でもありました——それに公爵のエルンスト・アウグスト *Herzog Ernst August* を尊敬していました

私は妻とオーダ通りに住んでいた時、『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’を読んでいましたが、義理の両親は『アルゲマイナー・アンツァイガー』でした。当時、私はまだ『フォアヴェルトツ』‘*Vorwärts*’は読んでいませんでした。『金属労働者新聞』‘*Metallarbeiterzeitung*’は、届けられていました。『共産党新聞』‘*Kommunistische Zeitung*’は、読んでいませんでした。

〈労働組合〉

私が労働組合に入った理由は、元々は父が原因なのです。彼は軍国主義者でした。つまり、カトリック政党の党员だったのです。彼はブラウンシュヴァイクの軽騎兵隊に所属していました。まあ、昔は父親が軍国主義者で、それに沿った生き方をしている家族でしたから、戦争中の1916年に、私は教会に組織されて、ブラウンラーゲ *Blaunlage* のケーニツヒスクルーク *Königs-krug* へ保養のために送られました。教会の児童合唱隊と保育園児の一人としてそこに送られたのです。

私にはまだ兄たちがいて、つまり私たちは3人兄弟で、それに姉が一人いました。そして、私はブラウンラーゲのケーニツヒスクルークで牛飼いの少

年として牛を追いかけて回しました。ケーニツヒスクルークは、今もまだありますが、そこには牛がいて、私は牛を追いかけて回さなければならなかったのです。朝、家を出て、昼には家に帰り、午後、また出て行くのです。それに、その家には泊り客が来ているので、大抵はすべての部屋がふさがっていました。上客ばかりで、ここブラウンシュヴァイクの大臣などが狩猟に来たのです。私は彼らの靴磨きをして金を稼ぎました。だから私はたくさんお金を持っていました。そうしたら母が、私を訪ねてきました。つまり、私は5月1日にケーニツヒスクルークに行ったのですが、まだ50センチもの雪が残っていました。そうしているうちに、夏になり、姉が夏休みの間、田舎で過ごしていたので、母が私を訪ねてきたのです。その時、私は母に200マルク以上も持たせました。それから私は10月までそこにいた後、家に戻りました。私の兄がその後、馬鹿な事をしでかしてしまいました。それで刑務所に入っていたのです。それで、彼は戦争が終わる直前に志願兵として戦争に行ってしまいました。

ある時、私は長兄と一緒に家の中で二人っきりでした。私たちの住居のある家の中庭は馬小屋でした。この馬小屋は後には車庫になったのですが、当時、この下には地下がありました。その大きな地下には、ランガーフェルト社が石炭を貯蔵していました。私たちには燃料がなくて、煮炊きもできなかったのです。ランガーフェルトの支配人に手紙を出して、50キロの石炭を譲ってくれるように頼みました。父もいなかったし、母が私たちの面倒をみていたわけですから、私たちには煮炊きや暖をとるために燃やすものが本当に何もなかったのです。そうこうするうちに、母がランガーフェルト社の支配人から短い手紙を受け取りました。その手紙には、もうランガーフェルト社にうるさくせがまなくてくれと書いてありました。私の父は、当時、戦地にいたのです。それでも、私はさらに何度か手紙を書いたのですが、それにもかかわらず、石炭をもらうことはできませんでした。そこで、私は石炭を盗んだのですよ。もらってもよいかどうかを尋ねずに、石炭を持ち出しました。なんとか煮炊きできるようにね。その後に兄はベルギーまで志願して行き、そ

こで戦争に嫌気がさしてしまったのです。それで、国に戻り、逃げ回りました。戻ってきて、私は彼を一晩、家に泊めて、その後、見つけれないように、知り合いの家にかくまいました。そうこうするうちに父も戦地から戻りました。戦争が終わる直前のことでした。つまり、休暇で戻ったのですが、休暇が終わって、父は食糧をつめた荷物を持って、ふたたび前線に行こうとしました。そこで私は、彼に「行く必要はないよ」と言いました。というのは、私には子供時代の友達とのつながりがあって、彼から情報を知らされていたからなのです。だから、「行く必要はないよ」「まったく、出発しないでいいんだよ」「どっちみち前線には行けないんだよ」と言ったのです。でも父は私の言葉にまったく耳をかさずに、出発してしまいました。そして4週間後にふたたび戻ってきたのです。しかし、持って出た食糧をそのまま持ち帰りました。もちろん、みんなかびだらけで、腐っていました。ええ、つまり、彼は軍国主義者のままでした。ランガーフェルト社は、父をもう雇ってもくれませんでした。そこで父はビュッシング社 *Büssing* に行きました。こんなことがあれやこれやあって、私は労働運動に加わったのです。つまり、私が体験した、戦争にまつわるいろいろな出来事が、私を労働組合に入れたのだというわけです。

母もアスパラガスの皮むきに行かなければなりませんでした。父が会社でそんなに稼ぎがなかったからです。母は、復活祭や聖霊降臨祭の時期には、缶詰用のアスパラガスの皮むきをしていたものです。母は第一級のアスパラガスの皮むき女工だったのです。

〈帰属意識〉

私の父は労働者ではなかったけれど、私は子供時代から、私が社会的に属す場所は労働者の世界である、と感じていました。どのように他人から評価されているかとか、敬意を払われているかなどは、感じてわかるものです。よその子供たちが外へ出かけて行く様子や、よその子供たちは遊びのための時間が私よりもたくさんあるなど、それによその子供たちは私よりもよく扱

われていました。そんなことを見ていて、自分の属す世界というものを感じとったのです。よその子供たちは教師に私よりも良い扱いを受けていました。私たちの家の隣にあったギルド・ハウスの管理人の息子は、いつも私たちよりもずっと遊び時間が多かったし、使うことのできるお金もたくさん持っていました。私たちは彼のようにはいきませんでした。私たちは、1ペニヒだって節約しなければならなかったのです。そういうことでお互いの違いを知るのです。だから、自分に「自分は彼とは違うのだ」と言い聞かせますよ。私は一度、学校で落第しました。やはり、私は、落第の原因も貧しかったからだと思っています。落第して、同じ学年を2度やらなければならなかったのですが、2度目の同じ学年で、世間を知ってしまいました。そこで何が起きているのかを見てしまったのです。もう2年目の勉強をすべてやってしまった後で、他のできない子供たちが、私とは違う扱いを受けていて、私だけが落ちこぼされたのを知ってしまったのです。それで、私は「他の子供たちは僕よりも自由に遊び回っているし、何でもできるのだ」と自分に言ったものです。彼らは、何でもできるし、見栄えもよい。私たちは、学年が上がる毎に、毎年、新しい学帽を与えられました。昔はそうだったのです。私の両親は、というか父は、いつもそのことを自慢に思っていたものです。しかし、さて、私は同級生と一緒に進級できませんでした。そこで私は古い学帽をまだかぶり続けなければならなかったのです。これは向上心の強い人間にとって、我慢ならないことでした。

〈組織の役職等〉

私は、1919年に金属労働者同盟に加入したのですが、配管工共同体、つまり配管工同盟という金属労働者同盟の中に組み込まれていた組織がありました。私はその副議長兼会計係を務めました。これを、1933年の金属労働者同盟の解散まで務めました。つまり、1926年から1933年まで、配管工同盟の副議長兼会計係を務めたのです。

10. 祝い事・余暇

〈祝い事〉

私にとって、祝い事は大きな意味がありました。私の家では、私たちの誕生日や復活祭、それにクリスマスの祝い事をしました。とくにクリスマスは、いつも少しお祭り気分でした。家族で祝ったのです。少し大きくなってからは、労働組合へ行ったり、青少年集会などには、家族の中で私一人だけが参加していました。そういった催しは、私にとっては忘れられない経験でした。かなり志の高い、同じ考えを持った仲間のもとで、かなり意識的なら、忘れられない経験です。さて、私はそこで多くの志の高い仲間と知り合いました。

私自身の、つまり 1929 年以降の私と妻の家庭では、私の舅や姑、妻、子供たちの誕生日を祝いました。それに、いつもクリスマスや復活祭などを祝いました。

労働組合のパーティや 5 月 1 日のメーデーは、私にとってはさらに大事でした。そういう時は、私の妻もいつも一緒でした。つまり、私たちは、5 月 1 日には一緒に行進しました。党のパーティにも、妻はいつも一緒に参加しました。

憲法記念日や母の日というのは、まあ、そんな日があるのだということは考えたことがあります。しかし、何か労働組合の催し物があると、私たちは出かけていきましたが、その他には特に祝いはしませんでした。母の日には、妻に何かちょっとしたプレゼントをしたり、思い出になることをしました。

私たちの家庭の大晦日は、素晴らしかったものです。両親の家ではなく、私と妻が家庭をもってからですが、私は、だいたい友人たちと一緒に過ごしました。私の両親の家では、大晦日は祝いませんでした。

私の子供時代で一番素敵だった祝い事は、復活祭とクリスマスでした。青少年時代は、自分自身の誕生日が一番でしたし、それに復活祭とクリスマスだって、楽しかったものです。大人になってからは、家族と一緒に祝うクリ

スマスと大晦日が一番大事な祝い事でした。

〈余暇〉

私の両親は、余暇にはほとんど家にいました。彼らはあまり外出しませんでした。カナリアが父の趣味でした。彼はカナリアを飼育していたのです。母には趣味はありませんでした。母には余暇などなかったということです。彼女にとっては、少しでも自分の休養時間がとれさえすれば、嬉しいといったところだったです。

私たちは、両親と遠足に行ったことはありますが、せいぜい学校から組織された遠足でした。私たちは大体、グリュネン・イエーガー *Grünen Jäger* とか、アツマー・ブッシュ *Atzumer Busch* などに一緒に行きました。私の妻は、彼女の両親としばしばレヒマー・ホルツ *Lechmer Holz* に行ったということです。路面電車でレヒマー・ホルツまで行き、そこからレヒマー・ホルツを通り抜けて、ヴォルフエンビュッテル *Wolfenbüttel* まで彼女の祖母を訪ねて歩いて行ったということです。

私の両親は、叔母たちや親戚の人々とばかり、よく行き来していましたが、父の同僚とは付き合っていませんでした。

父は、たいてい、パーペンシュティークの『ムッター・ハーベニヒト』‘*Mutter Habenicht*’へ行きました。この飲み屋には、今、私たちも、つまり私と妻も行きます。この飲み屋は独特でした。1912年に、私の家族はブルク広場に引っ越したのですが、そこで初めて、私は父にその飲み屋へ連れられて行きました。その飲み屋は、労働者が行きつけにしている小さな飲み屋でした。みんなその飲み屋に行ったものです。家への帰り道に、電車を降りて、寄っていくのです。半リッターのビールとハーベニヒトのおっ母さんがいましたからね。彼女は、袖を腕まくりして、きまって青い前掛けをしていました。この飲み屋には、5つのテーブルがあって、カウンターがありました。それに一つの隅には柱があって、もう一つの隅には斜めに掛けられた黒板があり、彼女はビールをテーブルに運ぶと、この黒板にチョークで印をつけました。

彼女は半リッターのビールを持ってくると、バツテン印をつけたのです。そうでないときは、チョークで引いた短い斜め線だけでした。

勘定を払う時に、彼女は客に「あなたの印はここので……」あるいは、「あんたは、ここの印だからビール5杯分払って」と黒板を見て言うのです。それに対して客が「いいや、俺はそんなに飲んでいないよ」と言うと、彼女は「黒板を見てよ、私があそこにつけた印を見て。あれがあんたの飲んだビールの分よ」と言うのです。彼女の店では、皿とナイフとフォークと塩が前に置かれて、いつもそれにタマネギがありました。そうして私たちは朝食をとったものです。市庁舎に仕事の用事で出かけた後には、いつも私のところのエンジニアと一緒にそこへ寄りました。どこかへ出かけると必ず、途中で寄って、ビールを一杯、飲んだものです。半リッターのビールと中・小のビールもありました。『ムッター・ハーベニヒト』は、本当に独特な居酒屋です。私の父は——近くに越してきたので——ほとんどここに通っていました。その他には、彼はめったに飲み屋には行きませんでした。この飲み屋は、古い社民主義者の集まる場所でした。父は、軍国主義者だったにもかかわらず、この飲み屋に通ったのです。父は、昔の知り合いにここに連れて来られたということでした。

大人になってからは、私はスポーツ協会に入っていました。余暇は主にスポーツをしていました。私のスポーツ遍歴は、ラウンダーズ *Schlagball*（：革製のボールをバットのような棒で打つ競技で、各12人からなる2チームの間で争われ、野球に似ている）で始まり、自転車ボロ *Radball*、その後ハンドボール *Handball* をしました。その後、いくらか大きくなってからはサッカー *Fußball* をしました。最初はどこのチームにも所属していない者たちが集まって、レオンハルト広場 *Leonhardtsplatz* で練習していたのですが、その後ヤーン広場 *Jahnplatz* で練習するようになりました。朝の6時には、私はもうサッカー場にいました。サッカー場で練習をしていたのです。スポーツが私の余暇の主な活動でした。

私は青少年指導者でした。ここのハノーファー *Hannover* の、シュタインフーダー湖 *Steinhuder Meer* に子供たちと行って、食事の用意は自分たちでしました。納屋で寝て、自分たちで煮炊きをして食事を作ったのですよ。納屋では右側に女の子、左側に男の子が寝ました。私は指導者として参加していたのです。到着してから2、3日後に、数人の女の子が私のところに来て、「Iさん、私たちはぜんぜん寝られません。あの男の子たちが、じゃまをするのです。私たちの毛布や何かをはぎ取って持っていってしまうのです。だから私たちは、ぜんぜん寝られません」と言うのです。そこで、「いったい、誰がそんなことをするのだい？」と私が尋ねると、「あの子とあの子とあの子、それにあの子もです」と名指しました。そこで私は「それじゃあ、彼らをどうしたらいいのか、考えてみよう」と言って、女の子をなだめたりしました。私たちは釜を持っていたのですが、軍隊の釜です。だから、燃料に木を集めなければなりません。釜を設置して、「お前と、お前と、お前」「これを持って」と言って、それぞれにひもを渡し、「さあ、行くぞ。木を集めてくるのだ」と言います。私たちは出かけて、木を集め、木をひもで束にまとめて、それを背負って帰ってきます。昼にはもう戻っています。昼ご飯を食べて、私は「さあ、これから2時間ばかり休んで、そうしたらまた出かけるから」と言います。午後から夕方にかけて木を集め、また木を持ち帰ってきたものです。そうすると、その子供たちは夕食を食べると、もう眠くなってしまいました。夕食後すぐに寝てしまったのです。そんな風にして2、3日はうまくいきました。そうすると、その内の一人が私の所に来て「Iさん、どうして僕たちはいつも木を集めに行かなくちゃならないのですか？」と尋ねるので、私は「どうしてか知らなかったのかい」と言うと、彼は「わかりません」と言います。そこで私は「そうすることによって女の子たちが寝られるようにさ。お前たちは女の子たちを寝させなかったじゃないか」「私はお前たちを疲れさせるために連れて出かけたのさ。そうしたら、女の子たちが寝られるからね」「お前たちを殴ることもできないし、そんなことをするつもりもないから、その他にどんな方法があるっていうのだい」と言うと、彼ら

はいたく感激しました。私は彼らを意のままに操ることができたのですよ。1920年代のことでしたが、私は彼らを殴ることはできなかったし、他にどんな方法があったでしょう。私自身、彼らを殴るなんて事はできませんでした。しかし、いずれにしても彼らは晩にはもう眠くなって、寝てしまいました。そんな風にして子供をしつけることができるのです。両親の家を出て、自分の家族をもってからは、私は私の子供たちとずいぶんしばしば出かけました。だいたいレヒマー・ホルツへ行きました。私たちは、つまり妻と子供たちと一緒に、私はしじゅうこの近郊へ遠足に出かけていました。それにスポーツ協会の関係でも私たちは遠足に出かけました。

1929年から30年の頃は、私と妻は、二人だけで私たちの自由体操協会員のたまり場へよく行きました。公衆浴場付属の居酒屋です。この居酒屋が協会員のたまり場になっていたのです。つまり、ヤーン広場 *Jahnplatz* で練習した後、そこで私たちは着替えをしていました。当時はまだ着替え用キャビンなどはありませんでした。つまり、そこは協会のクラブ・ハウスだったのです。そこには年取った主人がいました。彼は、ハンネス・ヴェデキント *Hannes Wedekind* という名前で、彼も腕まくりをして、青い前掛けをした、根っからのブラウンシュヴァイク人でした。私たちはいつもそこに行っていました。この公衆浴場はヴォルフエンビュットラー通り *Wolfenbüttler Straße* にありました。そこから下っていくと、市民公園です。この公衆浴場は、今もあります。このヴォルフエンビュットラー通りの左側に公衆浴場付属の居酒屋があつて、右側には昔は『ホルツガルテン』 *Holzgarten* がありました。この下には庭園レストランがあり、上には飲み屋がありました。戦争後はあのヴァリエテ *Variété* とか、いろいろな団体がこの建物に入っていました。第一次大戦後のことですが、ここで、いつも軽騎兵 *Husaren* の会合がありました。私たちは、ここにもよく行ったものです。以前は、自由体操協会が、今は孤児院のある、市の城壁外のザルツダールマー通り *Salzdahlemer Straße* で自転車競技のコースを作りました。あの通りは、昔は自転車競技用コースだった

のです。私たちは、これを譲り受けて、戸外運動場に作りかえたのです。そして、そこに私たちの居酒屋があったというわけです。それが自由体操協会のスポーツ協会ハウスなのです。それに、昔は、レオンハルト広場に、今はもうありませんが、『マグニ門シェンケ』‘*Magnitorschänke*’がありました。この飲み屋は、マグニ門 *Magnitor* にあります。私たちは、そこにもよく行きましたし、今も、私たちは、—— 私と妻ですが——、市場に行くと、その前にあるので、大抵はここに寄って、ちょっとビールを飲みます。この『マグニ門シェンケ』には、私たちの協会のサッカー選手や体操選手とか、皆が集まりました。まだ他にもあります。レオポルド通り *Leopoldstraße* に、市営屋内体操場があり、ここには体操仲間が集まりました。私たちはこの体操場で練習したのです。私は男子体操競技と一緒に練習していましたが、私は青少年体操手だったのです。夜、8時から10時までの男子体操の練習を終えると、私たちはクー通り *Kuhstraße* へ繰り出し、『ドーラ叔母さん』‘*Tante Dora*’とか、『ツア・グロッケ』‘*Zur Glocke*’といった私たちの協会員行きつけの飲み屋へ行きました。『ドーラ叔母さん』へ行って、晩酌をしたのです。私たちは、いつも金曜日に、男子部の体操の練習をしました。当時はまだ、土曜日は休日ではありませんでした。